

くまもと文学・歴史館報

くまもと
文学
歴史館

第5号 目次

巻頭言 梶尾真治(作家).....	1頁
企画展報告.....	2頁~4頁
収蔵品展・記念講演会・新収蔵資料報告.....	5頁~7頁
友の会活動報告.....	8頁

米国のブラッドベリのSF短篇に「雷のような音」があります。タイムマシンで太古の世界へ行った男が一匹の蝶を誤って踏み潰す。男が現代へ戻ってくると歴史が大幅に変化している。一匹の蝶が存在しなくなり、それを餌とするトカゲが飢えることになり、変化が積み重なって未来が違うものになってしまう。カオス系の「バタフライ効果」で有名です。

昨年、くまもと文学・歴史館で「梶尾真治の世界」展が開催されたのですが、そのオープニングの際に、ふと思いついた短篇だったのです。もしも、熊本地震が発生していなければ。私はそのときまで自分のコレクションを手離すことなく、江戸末期に建てられた古屋敷に住み続けていたでしょう。しかし、二〇一六年熊本は大地震を体験することになった。わが家は半壊し住むことが不可能。建て替えしか道はなくなりました。わが家を解体するにあたって処理しなくてはならない膨大な廃棄物。もちろん、その中には幼い頃から

私の創作に関わるアイテム類が多数含まれていたのですが。しかし、そのときの私にとってはすべてゴミ。廃棄のため方法を思案していたとき、ふと脳裏に浮かんだのは熊本近代文学館の初代館長の光岡明さんが私に告げた言葉「カジシン(私のこと)が原稿や資料を処分しようと思ったら、必ず文学館に連絡せなさんぞ」

だから、どうだというんだ。県立図書館も被災していたと聞いたぞ。迷惑に思われるに決まっている。しかし何故思い出した.....?

約束は果たしておくかと連絡をとる。それから対応の早かったこと。学芸員の皆さんが駆けつけ紙束やら本やら



企画展は カオス系から

梶尾真治
(作家)

そして「梶尾真治の世界」展に至る。二〇一九年の夏は私にとって夢のような時間になりました。私にとって産業廃棄物同然のものが丁寧に陳列され解説さえ加えられて整然と会場に比べられる。

こんなもの誰が見にくるものかと力をくくっていた全国各地はもとより、

原稿やら、自動車に積みこみ、何度往復されたことか。

そしてわが家は解体され新居と変わる。くまもと文学・歴史館に寄贈したことなど完全に忘れていたのですが、ある日、「くまもと文学・歴史館で梶尾真治さんの資料を展示したいのです」というご連絡が。

海外からまで訪ねて下さる。開催半ばから心を入れ替えました。しかも、なんと生きている人物の展示は初めてというではありませんか。であれば生きている展示物らしいことをやるう。

当初の企画にはなかった本人によるギャラリートーク。本人の秘蔵アイテムプレゼント、創作ノート公開。そして展示場での本人の接待。思いつくことはほとんどやりました。

来場の皆さんが果して満足いただけただろうか。もう私には知る由もありませんが、悔いはありません。そんなモロモロが熊本地震のバタフライ効果であったことを来場者の皆さんがどのくらいご承知かわかりません。世の中は、そんな風に動いていくものです。

梶尾真治(かじお・しんじ)
一九四七年熊本市生まれ。七一年「美亜へ贈る真珠」で作家デビュー。二〇〇三年に『黄泉がえり』が映画化され、原作映画とも大ヒットを記録。作品に『地球はブレイン・ヨーグルト』(星雲賞)、『サラマンダー殲滅』(日本SF大賞)他多数。

企画展報告

梶尾真治の世界

期間 令和元年7月18日～9月5日
会場 展示室1・2



第一線で活躍する熊本在住の作家・梶尾真治氏を特集し、その作品と功績を紹介する企画展を開催。全国から延べ七三九八人が来場した。なお本展は、平成二十八年度に梶尾氏から自筆原稿を含む貴重資料約三〇〇点の寄贈を受けたことが契機となっており、展示品の多くは同年に起こった熊本地震の被災資料である。

第一部「梶尾真治の作品世界」では旺盛な創作活動によって生み出されたこれまでの著作をすべて紹介。商業誌デビューを飾った短編「美垂へ贈る真珠」関連草稿や、大人気シリーズの一作目「おもいでエマノン」、日本SF大賞受賞作「サラマンダー殲滅」、映画化され話題となった「黄泉がえり」

など、三十点を超す自筆原稿が所せましと並んだ。来場者はオリジナルの小さな原稿用紙に見入り、とくに『黄泉がえり again』単行本未収録エピソードのコーナーでは、熱心に読みふける姿が見られた。

また、『おもいでエマノン』の歴代表紙原画(新井苑子氏、高野文子氏、鶴田謙二氏)や、手塚治虫氏が手がけた『未踏惑星キー・ラーゴ』表紙原画、むらいけんたるう氏による「黄泉がえり again」挿絵原画など、作品世界を視覚的に表現した関連資料も多数集まり、会場を彩った。熊日文学賞、日本SF大賞、星雲賞の賞状や記念品からは、梶尾作品の評価の高さもうかがえた。

第二部は「梶尾真治をとりまく世界」をテーマに、作品世界とは異なるカジシンワールドを紹介した。「世界のはじまり」コーナーでは小学校時代の通知表や日記が展示され、来場者の目を引いていた。日本最古のSF同人誌『宇宙塵』に掲載された若き日の作品や、自ら編集した同人誌「英利庵」、初めて原稿料をもらったという『SFマガジン』懸賞応募作品など、本格的に執筆を始めた十代のころの資料も充実。当時、熊本唯一の『宇宙塵』同人で梶尾氏の小説の師であった光波耀子氏についても紹介した。

最後に本展のきっかけとなった平成二十八年熊本地震に焦点をあてた。被災直後に新聞掲載されたエッセイには、「心うたれました」「思わず涙が出ました」「元気づけられました」といった言葉が寄せられた。

続いて映画評論のほか、山やキノコに関するエッセイなど、創作以外の仕事に関する資料を展示。カジシンワールドの幅広さを印象づけていた。高橋酒造ホームページで連載中の「カジシンエッセイ」コーナーでは、梶尾氏のかわいらしい似顔絵でおなじみの林田抖與子(百鬼丸)氏による挿絵の原画が登場した。

黄泉がえり、黄泉がえり again 熊本 Map (中央区)。小説に登場する地名のみで熊本の地図を作成



祈りの島 天草とその海

期間 令和元年9月19日～11月10日
会場 展示室1



二〇一八年七月に長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産が世界遺産に登録された。その一周年に、当館は企画展「祈りの島 天草とその海」を開催した。

天草は日本(九州)の西端にあり、アジア大陸に近い。アジア、ヨーロッパの影響を一番早く受けた。一五六六年、天草の領主・志岐麟泉が洗礼(ドアン・ジョアン)を受けている。キリシタン大名として知られる大友宗麟の受洗より十年以上早い。

天草ロザリオ館が所有するバッジ・メダルは大分や博多で同じものが出土しており、発掘調査によって十六世紀後半の制作と判明している。南蛮寺での十字のあるキリシタン墓碑の拓本も



提示し、導入とした。中心には鶴田一郎氏の「天草四郎 祈り」。

続いて島原の乱の古戦場となった高岡城や原城に関する絵図と古文書を展示。今回永青文庫所蔵の一揆側が残した矢文・書状・法度書ほかを展示した。いずれもよく知られた史料だが、たとえば一揆方の渡邊佐太郎が出した書状では

一 志ろやま(城山)のこすへ(梢)ハとある初めの文字は、ラテン語(ポルトガル語)の大文字をイメーシし、大きく、太い線で絵文字風に描かれる。しかも「志」の字の「土」と「心」の、「土」の「十」の上下左右にかぎをつけて、十字架にしている。実物を見て

初めて気づくことである。また「ろ」の字は艦を絵にして絵文字にしていた。キリシタンは籠城していても、信仰心に満ちての余裕があって、悲壮感が感じられない。

二月朔日付の「益田四郎フランシスコ」の城内からの書状も示されたものだ。文中には「おらしよ」、「ぜじゅん」(絶食、「じしびりな」(鞭打ちの苦行)といったポルトガル語が見られる。「殊に今ほどくわれすまのうちと申す」とある「くわれすま」はポルトガル語の Quadragesima で復活祭の前の四旬節をさす。復活祭は「春分の日以降の満月の次の日曜日」なので毎年日は変わり、一六三八年の場合は四月四日で、日本暦では寛永十五年二月二十日にあたる。西暦二月十七日、日本暦では寛永十五年一月四日が四旬節の始ま



りだった。

敵総大将・板倉重昌の敗死(正月一日)を受けてその三日後、意気高揚のうちに四旬節にはいる。キリストの受難、磔刑までの日々を城内では戒律期間とした。復活祭は落城の九日前、苦しいさなかに祝ったのだろう。書状が出されたのは日本暦二月一日である。半ばを過ぎて気持ちは途切れがちだった。書状には緩みを戒める言葉がある。一揆方の信仰にかけた籠城の日々と、清貧の心情をまことにリアルにしることができている。壮絶な史料であった。

江戸時代後半の天草崩れの史料が残されており、今回、崎津の関係部分を展示できた(上田家文書)。Hidden Christian の実態を詳細に示す史料であり、世界遺産登録にあたり、学術的な裏付けとして大いに貢献した史料である。かれら彼女らは「アンメンゼウス マリアさま」などと唱え、異名(洗礼名)を持っており、まぎれもなきキリシタンであったが、代官所は厳重に処罰することはなく、「心得違い」として、監視は行いが、厳罰に処することとはなかった。日常生活は継続された。なお会期中、平田豊弘氏による「天草のキリシタン」祈りと暮らし」と館長・服部による「世界文化遺産に登録された天草・崎津集落の歴史と文化」の講演があった。(服部英雄)

山崎文庫展

「医学・歴史・蒐集に 情熱を傾けた山崎正董」

期間 令和2年1月23日～2月27日
会場 展示室1・図書館ギャラリー
※新型コロナウイルス感染症拡大防止のため繰り上げ終了



熊本県立図書館所蔵の「文庫」を紹介するシリーズ企画展の第三弾。昭和二十五年、遺族により山崎正董が蒐集した約九千点の蔵書が熊本県立図書館に寄贈された。「山崎文庫」と名付けられ、戦災で焼失した県立図書館の復興期の中核をなした。今回の展示では、「山崎文庫」と、山崎正董の功績を併せて紹介し、展示室1で六十点、図書館ギャラリーで二十八点を展示した。

つづいた『谷口長雄宛書簡』や、徳富蘇峰が「医学に関する文献の宝庫」と評した著書『肥後医育史』等を展示し、産婦人科医・学校経営者・教育者・医学教育史研究者と精力的に活躍したことを紹介した。また、熊本大学・熊学会の協力を得て、昭和天皇の御臨幸時に使用した「御臨幸奉迎計画書」・「天覧品説明書」等を展示した。

第二章「歴史家・山崎正董」では、正董が退官後、医学界から身を引き、歴史研究、新聞への執筆、講演活動に取組んだことを紹介。横井小楠に対する否定的な風潮を見直す基礎資料となった『横井小楠(傳記篇・遺稿篇)』、最後の執筆活動となった『長岡監物伝原稿』、現地協力者からの書簡を展示した。



第三章「山崎文庫」では、熊本ゆかりの文学者の作品や、奈良の古寺図録『法隆寺大鏡』、『日本外史』の版本・抄本、『セウガク一年生』『女性問題』等の全国でも稀な雑誌の創刊号を展示した。また、写真アルバムには、多くの文化人・歌舞伎役者と交流した写真が収められており、拡大パネルで展示した。山崎文庫の内訳は、全冊数が八四九一冊(うち雑誌二八三三冊、雑誌創刊号一九二五冊)、分野も広範囲(歴史一三%・文学二二%・総記一四%・芸術一三%・社会科学一〇%...)であることが改めて分かった。

第四章「山崎コレクション」では、国内外の貝殻・古瓦を蒐集したコレクターとしての一面を紹介。貝殻・古瓦は昭和二十七年に熊本博物館に寄贈された。美しい文様の貝殻や、貝覆いの絵貝、琉球・朝鮮の古瓦、刻画石を展示した。

図書館ギャラリー「山崎博士の写真帳」では、退官後に正董が旅行した熊本県内をはじめ、奄美大島・沖縄、中

国・朝鮮で撮られた写真を紹介。昭和初期の原風景をとどめた写真群を拡大パネルで展示した。展示室3では、山崎正董にちなみ医療に関するマンガコーナーを設置した。

企画展関連行事として、講演会とギャラリートークを開催した。二月二日に小野友道氏(元熊本保健科学大学学長)による講演会「山崎正董―蘇峰をして『我が熊本県の恩人である』と言わしめた男』を開催。医学者・山崎正董について分かりやすく解説し、好評を得た。二月九日に美濃口紀子氏(熊本城調査研究センター文化財保護主幹兼主査)による「熊本博物館所蔵・山崎正董古瓦コレクションについて」を開催。蒐集された古瓦の特徴や、沖縄旅行の足跡をたどった際のエピソードを紹介した。一月二十六日に当館職員によるギャラリートークを開催した。



小野友道氏



美濃口紀子氏

収蔵品展 アーカイブズシリーズ

アーカイブズに見るくまもと13

◆世界のなかの西南戦争

没後70年 長田秀雄

没後50年 平川虎臣

令和元年5月17日〜7月7日



「世界のなかの西南戦争」をテーマに、県政資料を中心に、世界的な電信技術や軍需産業の変化など、急速に進むグローバル化のなかで変わっていく近代日本の姿を紹介。劇作家・長田秀雄、小説家・詩人の平川虎臣について、原稿や書簡を元に二人の業績を紹介。

アーカイブズに見るくまもと14

◆殿様の教養 相良家の医術・武術

生誕120年 詩人・蔵原伸二郎

令和元年11月27日〜令和2年1月12日

「殿様の教養」相良家の医術・武術をテーマに、相良文書を中心に、人吉藩相良家当主に伝えられた家伝業



の製法・効能、馬術の秘伝書・タイ捨流の目録を紹介。
生誕百二十年の節目を迎えた阿蘇生まれの詩人、蔵原伸二郎の生涯と作品について、創作ノートや詩稿などの貴重な新収蔵資料をもとに紹介した。おもな展示資料は伸二郎の存命中に刊行された著作全十三冊や、画幅「青猫風景」、自筆原稿「崑崙」、「黄昏いろのきつね」、「岩魚」など。また、棟方志功から送られたハガキからは、志功と伸二郎がお互いの芸術を通じて親交を持ったことが読み取れる。



くまもと文学・歴史館収蔵品記念講演会 熊本ゆかりの詩人・蔵原伸二郎の世界

くまもと文学・歴史館収蔵資料を中心に

講師：岩本晃代（崇城大学教授）



影響が強すぎてなかなか超えられない、そのもどかしさから詩をやめ小説を書き始めます。

その後結婚し、短編小説を書き、初めて出した本が昭和二年の『猫のふる風景』という短編集です。昭和五年に当時第一級の小説家川端康成から褒められたことで小説家としてスタートしていきます。昭和七年、世界的な版画家棟方志功との交流もありました。昭和九年、保田与重郎という文芸評論家、蔵原の家を訪ねた折に、以前書いてしまいがちだった蔵原の詩を見つけて「素晴らしい」と、自分の雑誌『コギト』に十編程ずつ毎月発表したのです。そうしますと、昭和十年、朔太郎から「この詩人の新しき誕生は、日本の詩壇にとって驚異である」と褒められ、一気に今度は詩の方に引き戻されていくという、紆余曲折がありました。

蔵原生誕百二十年という記念すべき年に蔵原の収蔵品展が行われていますが、本日は、その収蔵品に触れながらお話をさせていただきます。
蔵原伸二郎については北里柴三郎の甥、九州学院出身、阿蘇神社の直系、薬園町に住んでいたというのほわわかついては、その前後がよくわかってはいたのですが、その前後がよくわかってはなくて、蔵原研究を始めた時には年譜作成のための情報集めが非常に大変でした。蔵原のご長男、故蔵原惟光さんや九州学院の支援もいただいて出身小学校が熊本師範附属小学校尋常科とわかりました。大正八年、慶應義塾大学に入り、そこでは小説家の石坂洋次郎と同級生で、他にもいろいろな文学者と交流を持ちます。大正十二年に萩原朔太郎の詩集『青猫』に衝撃を受け一気に詩を書き始めますが、朔太郎の

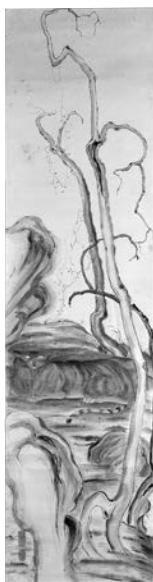


蔵原伸二郎

思います。昭和十四年に『東洋の満月』という詩集を出します。これには保田与重郎が見つけた詩を中心に六十五編が収録されています。このときの装丁が棟方志功です。

その後蔵原は戦争詩を書いて、戦後はかなり批判され、東京から埼玉県飯能市に移りますが、そこで転機があります。昭和二十四年、飯能高校の文芸部員だった町田多加次さんが、有名な詩人が来た、交流を持ちたいと近所の高校生を集め蔵原のもとへ通い始めたのです。その町田さんたちの力で昭和三十九年に最後の詩集『岩魚』が出版されました。これが読売文学賞を受賞します。昭和四十年一月に受賞が決定し、二月六日授賞式の朝、蔵原は危篤に陥ります。その後の長い危篤状態の時に、町田さんに最後の詩「足跡」を病床から口頭で伝え、それを筆記してもらって亡くなるのです。

大まかに蔵原の生涯をたどってきま



画幅「青猫風景」

した。最初が阿蘇・熊本時代、著名な人たちと交流した東京時代、そして戦後の飯能時代です。詩人として活動したのが東京と飯能です。それぞれ代表作として、戦前から『東洋の満月』を、戦後から読売文学賞の『岩魚』を紹介しています。

『東洋の満月』からは「満月」。蔵原らしさが一番よく出ている詩です。すぐくエネルギッシュな詩ですが、〈蛇〉〈蛇〉〈へとかげ〉〈爬虫〉等の朔太郎の詩によく使われている言葉が詩の中に多く使われています。ですから『東洋の満月』は朔太郎を抜けきらない、玉石混淆の詩集という厳しい評価もされています。けれども陰気な感じはなく、躍動感や元気を感ぜさせる詩だと思えます。一方、とても絶望したような詩「記憶の馬」等も入っています。思い出の中の〈青〉という名前の馬をモチーフにした詩ですが、このような詩も含まれるため、統一感のない分裂している詩集だという評価もあるのです。

これから二十五年たってどう変わったか、『岩魚』の詩を見ていきたいと思えます。この中で、一番評価されたのが狐関連の六編の詩です。慶應義塾の時の同級生だった石坂洋次郎は『岩魚』を題材にして「ある詩集」という

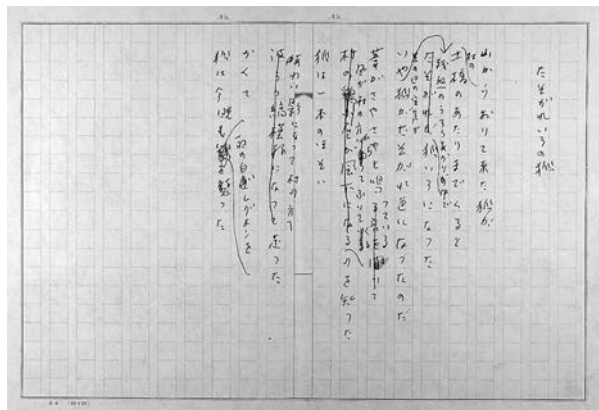
小説を書き、その中で特に狐関連詩を評価しています。詩を読んだときの衝撃を、「背中をくちやされるようなショック」

ク、「目の膜がはがされたように蔵原の詩の一行一行が、私の脳裡に鮮明に強烈に灼きつけられた」と、友人らしい率直な表現で書いています。

狐の詩から二つ読みます。最初の「めぎつね」は、狐の背中に雪がふつたら〈へかけ〉になるという、現実的にはあり得ないことからざらりと始まります。夢と現実の間を行き来する狐が描かれていて、最後に雌狐は新しい生命を宿して山に帰って行きます。短い詩ですが、イメージが広がって読者はさまざまなストーリーを描くことができます。『黄昏いろのきつね』は風景の中に溶け込んでゆく狐で、「めぎつね」からの連作としても読めます。

最後の「足跡」は町田さんに口頭で託した人生最後の詩です。狐が時間と空間を超越してしまい、狐が蔵原自身だと感ぜさせる詩です。青猫が朔太郎の化身だと、蔵原は以前批評に書いていましたが、『青猫』時代からの朔太郎の影響を、やっとここで自分のものにしたのではないのでしょうか。まさに詩人の最期を象徴するかのような詩です。

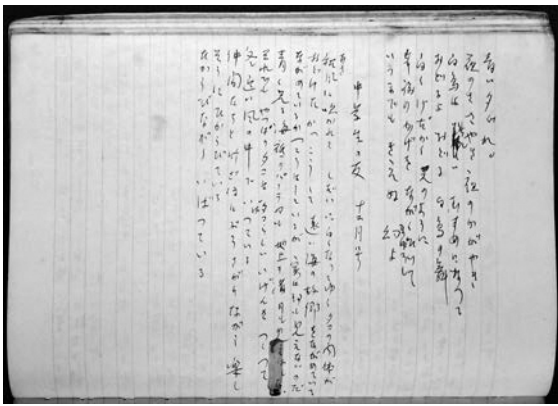
戦前と戦後の代表詩集から幾つか紹介しましたが、やはり二十五年で随分詩風が変わったのを感じられたかと思えます。この二十五年の歳月、特に戦後の数年間は、蔵原にとって大変苦しい時代でしたが、一方で詩人として成長する時期もありました。最後に、その時期に書かれた児童詩について紹介します。実は戦後の蔵原



詩稿「黄昏いろの狐」

は精神的にも経済的にも逼迫していました。しかしながら、蔵原は『雑草』という、昔のガリ版刷りで雑誌を出しています。同人は町田さんをはじめ飯能の若者達です。それと同時に、蔵原は小学館の雑誌に詩を書いて原稿料をもらうという、蔵原にとって最初で最後の「生活のための仕事」をしています。また、このころの苦しい気持ちや垣間見える資料が丸山薫宛の書簡です。丸山薫は明治三十二年生まれの伸二郎と同級の詩人で、学校は違いますが交流があったのです。心の友にしかこぼせない心情が手紙に書かれています。それでは、収蔵品の蔵原ノートから子どものために書かれた詩を紹介しま

す。最初に昭和三十一年『小学校六年生』掲載の「青いチョウ」です。商業雑誌に書いた子ども向けの詩でも蔵原は全然手抜きをしていないのです。他にも「あゆを追う少年」等のいい詩がたくさんあります。「タコのつりぼし」は昭和三十三年『中学生の友』に発表されたものです。朔太郎の詩「死なない蛸」と同じ蛸がモチーフですが、朔太郎の蛸は自らを食べつくして見えなくなってしまう「蛸」です。一方、蔵原の蛸は干からびてつりぼしにされても、どこかに威厳をもった「タコ」です。中学生の年代の子どもが読む、思春期の繊細な心に響くのではないのでしょうか。そして、今、大人が読んで価値の高い詩だと思えます。



創作ノートより「タコのつりぼし」

ここで児童詩の集大成として「五月の雉」を読みます。この詩を授業で学生たちと鑑賞しました。今の子どもたちは本を読まないとか語彙が少ないとかよく言われます。それは確かに一部事実ですが、よい作品に出合うことによって感性は磨かれていきます。「現代の子どもたちと読む蔵原作品」として、学生たちが書いた「五月の雉」の鑑賞文をいくつか紹介します。「五月の雉」については、幻想的な自然風景の中に、生命への愛をそそぎこんだ作品であり、蔵原晩年の代表作のひとつであるという私自身の解釈は、今も変わっていません。ただ、学生たちの鑑賞文を読んで、私が思うのは、やはり子どもの感受性は、外から刺激を与えることで触発されて磨かれていき、さまざま新しい読みが生まれるということです。文学が苦手だと自分たちで思い込んでいる学生も少なくないのですが、面白い解釈や考え方がたくさん出てきて、私も学生から学ぶことが多いです。

おわりに、蔵原の詩の魅力について。なかなか一言で言うのは難しいのですが、蔵原の詩は人の心に元気を与えてくれますね。そして潜在的にみんなが持っている思いやりや優しさ、そういった心の中にあるものに気づかせてくれるのではないのでしょうか。学生たちと詩を読んでいて特に思います。

蔵原の詩の魅力というのはそのようなところにあるのではないかと思います。

新収蔵資料

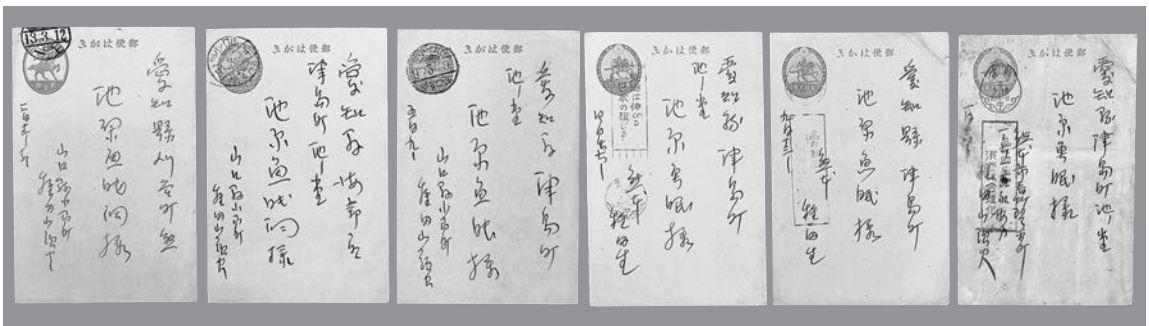
○種田山頭火

池原魚眠洞宛ハガキ 六通

種田山頭火が昭和六年から十三年にかけて、愛知県の俳人 池原魚眠洞に送ったハガキ六通。魚眠洞は荻原井泉水に師事し、一時は「層雲」の選者も務めた。この六通は、いずれも『山頭火全集 書簡編』には未収録の資料である。

山頭火は昭和五年〜七年に熊本市に仮寓しており、今回のハガキのうち昭和六年消印の三通は、住所が「熊本」となっている。

内容は、山頭火が熊本で発行していたガリ版刷りの句誌『三八九』に関することや、魚眠洞から贈られた句集に対する礼状、句作のこと、生活のことなど多岐にわたる。なお、昭和六年四月二十六日付のハガキに記された「陽が射して何ンにもない」は、『山頭火全句集』に見られない一句である。そのほかには、「少しばかり歩いて来ますつもり」、「歩きだしたくてなりません」、「今から九州へ旅立ちます」などの言葉があり、旅に生きた山頭火の胸中や暮らしぶりをうかがうことができ



友の会事業

◆定例事業

○月案内発行 くまもと文学・歴史館の行事等を会員へ送付。

○文章勉強会 毎月一回開催。有志による文章講座

○歴史勉強会 毎月一回開催。有志による古文書講座

◆湧水二十七号発行

会員の作品を集めた文芸誌「湧水」を年一回発行。

◆今年度の主な事業

4月

○第3回熊本地震朗読会(14日)

5月

○くまもと文学・歴史館友の会総会及び記念講演会(13日)

平成30年度の事業・会計報告、令和元年度の事業・予算計画、新世話人が決定。ノンフィクション作家の井上佳子氏による記念講演会を開催。演題は「『個』とジャーナリズム」



井上佳子氏

6月

○初夏の文学・歴史探訪(7日)

南関御茶屋・金栗四三生家・北原白秋生家・佐野常民記念館・佐賀軍発祥の地・佐賀城跡・佐賀城本丸歴史館・下村湖人生家

○第4回湧水講演会(13日)

講師 眞杉泰輝氏(友の会会員)
演題 二茶の俳風と肥後逗留



11月

○秋の文化講演会(3日)

講師 中村青史氏
演題 私が関わってきた熊本本の文学



中村青史氏

○秋の文学・歴史散歩(13日)

青蓮寺阿弥陀堂・城泉寺阿弥陀堂・湯葉里・湯前まんが美術館・下村婦人会市房漬加工組合・錦町物産館



12月

○岩本晃代氏講演会(1日)

1月

○「湧水」合評会(19日)

くまもと文学・歴史館のご案内

所在地

熊本市中央区出水2丁目5番1号
(熊本県立図書館併設)
電話(096) 384-5000(代)

開館時間

午前9時30分～午後5時15分

休館日

火曜日・毎月最終金曜日

年末年始・特別整理期間

入場料

無料

最寄りの交通機関

(1)市電Ⅱ「市立体育館前」下車・徒歩5分

(2)バスⅡ「水前寺公園・県立図書館入口」下車・徒歩5分

文学・歴史館友の会会員募集中

この会は文学や歴史に関心のある人々の自主的な集まりです。くまもと文学・歴史館を核として、文学・歴史愛好者の大きな輪を作りたいと願って組織するものです。詳しくはくまもと文学・歴史館受付へお問い合わせ下さい。

くまもと文学・歴史館報

第5号

令和2年(2020年)3月31日発行

編集発行 くまもと文学・歴史館

〒862-8612 熊本市中央区 出水2丁目5番1号

電話 096-384-5000(代)